

日本人のキリスト教観

—遠藤周作『白い人』『黄色い人』との比較を通して—

磯部 笑子

日本大学大学院総合社会情報研究科

The Japanese View of Christianity

—Through the Comparison between *Shiroi hito* and *Kiiroi hito* of Shusaku Endo—

ISOBE Emiko

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

While Christians are about 30% of the world's population, the percentage of Christians in Japan is only 1%. I think that the reason why Christianity does not penetrate Japanese society is found in Japanese concept of "resignation." And then I intend to clarify this idea through the comparison of the ideas of *Shiroi hito* and *Kiiroi hito* developed by Shusaku Endo in this paper.

1.序

世界の総人口約 73 億人のうち、キリスト教徒総人口は 23 億人と言われており、世界総人口の約 32% を占めている¹。しかし、今日の日本のキリスト教徒は、カトリックとプロテスタントを合わせても、日本の総人口の 1% 程度である²。キリスト教が外国の宣教師によって日本に布教されたのは、16 世紀のこととされているが、それから弾圧の時代があったにせよ、実に 500 年以上の歴史を有している。にもかかわらず、日本においては、キリスト教が根づいていないのが実情であると言える。

キリスト教が日本に根づかない理由について、カトリック作家である遠藤周作は、日本人の「本能的にもっている汎神的血液³」という表現をして、日本独特の風土を説明している。また、稲垣良典氏もその理由について、「日本人の宗教性・霊性」だと述べている⁴。日本は古来より仏教の信者であるというのも、理由の一つと言えるかもしれないが、隣国の韓国は元来が儒教国でありながらも、現在は韓国総人口の約 30% がキリスト教徒であり、世界総人口におけるキリスト教徒人口の比率とほぼ同率である。しかも、第二次世界大戦において植民地支配されたという歴史的屈辱も、敗戦国となり、米軍の占領下となった日本人の心境と類比できよう。この韓国との

差はどこから生じているのであろうか。筆者は、その理由を、日本独特の風土とその歴史から培われた「諦観」にあると考える。その深い独特の宗教観を探るべく、遠藤周作の視点を手がかりとする。言うまでもなく、遠藤周作は優れた作家というだけではなく、大学時代に評論「形而上の神、宗教的神」や、評論「神々と神と」を発表するなど、カトリック作家の視点から独自のキリスト教理論を展開している。そこで、彼がカトリック信者の見地から著した『白い人』『黄色い人』に着目し、その対比から、日本人独特の宗教観及び諦観を明らかにすることを、本稿の目的とする。日本におけるキリスト教の布教について理解を深めることは、日本人の宗教性を探究する上で、非常に重要なことであると言える。

なお、本稿の前半では、『白い人』『黄色い人』を通して白人と黄色人の宗教観の相違を探り、後半では遠藤の小説のテーマである「裏切り」の中に潜む「諦観」に焦点を当てる。

2.『白い人』にみる白人の「無諦観」

2.1『白い人』誕生の背景

遠藤は、1948 年に慶應義塾大学仏文学科を卒業後の 1950 年に、占領下にある日本で初めての留学生としてフランスに留学している。その留学体験は、後

に上梓する『留学』『青い小さな葡萄』など、数多くの作品を生み出すほどの衝撃を遠藤に及ぼした。とりわけ敗戦国だった日本のイメージは、当時のフランスでは最悪で、遠藤は黄色人として肩身の狭い思いをしたと、数々のエッセイで述べている⁵。彼は、母親が洗礼を受けた影響から、何の考えもなく12歳のときに自身も受洗したが⁶、その後の大戦によるアメリカ蔑視の風潮の中、外国の宗教の信者でいることに違和感を覚えた。後ろめたさを感じつつも、棄教することができず、「日本人でありながら西洋の宗教を信じる」ことに向き合うことが、生涯のテーマとなった。前述のフランス留学の際に、敗戦国民であった遠藤に渡仏の許可がおりたのは、カトリック教徒であったことが大きかったと言える。留学に際しては、当時の教会の神父が一切の手続きを行っており、渡仏する船が出航する間にビザを持って走って来たと、遠藤は述懐している。なかなか渡航の許可がおりない中、留学の準備を進める遠藤の胸中は穏やかではなかったであろうが、そんな遠藤を救ったのが、皮肉にも信仰で悩み続けてきたキリスト教であった。残念ながら、肺結核を患ったために約2年半で帰国を余儀なくされたが、遠藤にとって、フランスへの留学体験は大きな衝撃であった。特に衝撃を受けたことの中のひとつが、アウシュヴィッツの真実を知ったことであった。遠藤は留学中に日本人の誰よりも早く、悲惨な状況を目の当たりにしたのである。この体験が、「悪」の問題を考えさせ、『白い人』の創作に繋がることになる。

フランスでの遠藤は、「日本人」というだけで差別的な扱いを受けた。蛮民というレッテルを貼られ、嫌というほど黄色人種という辛酸を舐めなければならなかった。ホームステイ先では、「遠藤周作」ではなく、洗礼名の「ポール」と呼ばれており、そこでも、カトリック教徒という立場が遠藤の居場所を作っている。予々遠藤は、キリスト教に対して「合わない服を着させられた」「お見合い結婚させられたようなもの」という表現をして、「西洋の服を東洋の服に仕立て直す」「出て行けと行っても、向こうが出て行かない」などと、何とか自身の中でキリスト教信仰との折り合いをつけようと葛藤していたが、その頃の遠藤にとってはカトリック教徒であることが、

救いであり、内心誇らしい思いであっただろう。晩年の作品『深い河』では、信仰への葛藤の末にたどり着いた結論のひとつを、大津を通して「その言葉が嫌なら、他の名に変えてもいいんです。トマトでもいい、玉ねぎでもいい」「神は存在というより、働きです。玉ねぎは愛の働く塊なんです」と語らせている⁸。

『白い人』『黄色い人』においては、『白い人』が「絶対悪」に対して、『黄色い人』は「罪の意識」であるとされるのが一般的である。また、田中葵氏⁹によれば、遠藤が本当に描きたかったのは、白い人と黄色い人の距離感である。遠藤自身、『白い人』で芥川賞（第33回）を受賞した際の感想を、以下のように述べている。

作品の第1行にジャック・モンジュという外国人の名を書きつけました。すると、この名の背後に神と悪魔、神と人間、善と悪、肉体と霊、それらすべての血なまぐさい戦いを描けるような気がしました。けれども私はジャックではない。白人ではない。黄色い日本人であります。それ故私は再び、日本人の名をそこに書きました。すると、突然その黄ばんだ顔には劇がなくなってしまうのです。作家として私はこの点に非常に苦しみました。

「白い人」を書いた後、私はやがて、「黄色い人」を書く義務を感じます。神のない世界には、劇がないという苦しみがあります。この苦しみを、あの神との闘いを描いた欧州の小説までに対抗させることは、作家としての私の夢であります¹⁰。

遠藤は、『白い人』を書き上げた時点で、「白人」と「黄色人」である自身との距離感を感じ、黄色人としての「神と悪魔」「神と人間」「善と悪」「肉体と霊」についての対比を書かなければならないという義務を背負った。黄色人としての「意識」を書かなければ、この不思議な距離感は埋められないと考えたからであろう。

2.2 白人にとっての「罪」と「悪」

遠藤は、『白い人』において、大戦下のフランスを

舞台に「悪」を描いている。主人公である「私」は、ナチスという「悪」を客観的に評価しつつも、不遇な生い立ちから、フランス人でありながら祖国を裏切り、ナチスに加担して悪を貫く。その過程で出会った、神学生の信仰と葛藤の中に、「英雄になりたい欲望」を見て取り、激しく憎む。そして、信仰の対象であるキリストに闘いを挑み、神学生が密かに思いを寄せるマリー・テレーズとの仲を引き裂いて行く。ここで特筆すべきは、主人公が自身を「悪」だとはっきり自覚している点である。ナチスに加担した後、ナチスの敗北が決定的になってもなお、彼の「悪」への執念は一点の曇りもなく、「逃げ切る」と宣言している。彼はその不遇な人生から、自分の運命を憎み、純真に神を求める神学生の信仰心に嫉妬し、独善的であり欺瞞であるとし、悪に徹する決意をする。彼の見たナチスの実態は、拷問によって快感と陶醉を得るといふ、想像を絶するような世界であった¹¹。しかし、私はそれに対して無感動であり、客観的に傍観していた。彼の見た拷問者とは、単なる野蛮人ではなかった。美しいものに魅かれ、音楽に癒される、ごく一般的な感性を備えたどこにでもいそうな人間であった。ここで描かれた「悪」は、遠藤の捉える「悪」と隔たりはない。『白い人』は「絶対悪」というものの存在によって、信仰のあり方を表現している。主人公（私）は見事なまでに躊躇なく悪を演じきっており、神学生を死に追いやってもおなお罪悪感は微塵も感じていない。一見すると、この小説は「悪」が人間の信仰心を試しており（ちょうど新約聖書において悪魔がイエスを試すかのよう）、神学生の自殺によって信仰が悪に屈したかのように見える。しかし、遠藤が描きたかったのは、決して信仰の無力さではない。神に挑み悪を演じることこそ、信仰への渴望が見え隠れしているのである。ちょうど、『深い河』の成瀬美津子がキリスト像に向かって「あの人をあなたから奪ってみましょうか¹²」と神に挑戦したように、「悪」の意識は信仰への憧れ、絶対的なものへの希求である。遠藤は「罪」と「悪」とをはっきりと区別している。人間の弱さゆえに罪を犯しても、神によって救われるが、悪はとことん堕ちるところまで堕ちるといのが、遠藤の考え方である。実際、『白い人』の神学生は、弱さ

ゆえに自ら命を絶つが、遠藤の中では神学生は神によって救われる。逆に、悪を追究する主人公は、どこまでも深い悪の渦に飲み込まれて行くのである。

『白い人』の中では、主人公に追い詰められたジャックとマリー・テレーズは、自己犠牲という形での究極の愛を演じており、「悪」に対して挑むことによって信仰心を見事に表現している。遠藤は、自己犠牲愛を「一番辛い愛の行為¹³」だとしている。その「一番辛い愛の行為」を相手に捧げることが、真の信仰心であり、愛なのである。一方、ジャックとマリー・テレーズの究極の愛を目の当たりにした主人公は、この愛の行為自体に「意味がない」と感じる。しかし、ジャックが自死したあとに、マリー・テレーズに兄のように優しく声をかける様子には、微かな憐憫の情が読み取れるだろう。一見、主人公は神への不信仰を通して悪を貫いているかのように思えるが、実際には愛を渴望し、神への信仰を希求しているパラドックスが読み取れる。『白い人』の織り成す人間模様から窺える個々人の姿勢には、確たるものへの追求心があり、決して屈することはない。このことから、白人の「無諦観」が伝わってくるのである。

3. 『黄色い人』にみる黄色人の「諦観」

3.1 デュランの3つの罪

『黄色い人』は、第二次世界大戦中の神戸を舞台に、聖職者に禁じられている「女を知る」という禁忌を犯して教会から追放されたデュラン元神父の日記と、大学生の千葉がブラウ神父に宛てた手紙で構成されている。それは、白人と黄色人の信仰の意識の差を明白にさせるための配役であろう。デュラン神父は、夙川教会の熱心な聖職者であった。たまたま出会った女性キミコを不憫に思い、周囲の反対を押し切って教会にかくまったが、彼は肉欲に打ち克つことができず、キミコという女を前に、自分の中の欲望に負けてしまう。そこで彼は最初の罪を犯す。この事件をきっかけに教会を追われ、聖職者ではなくなった彼は、キミコと惨めな夫婦生活を余儀なくされた。彼は仲間のブラウ神父から恵んでもらう生活費で、やっとの思いで異国の地で生きているのだが、彼はキミコに愛情を感じていない。「キミコさえ

いなければ」教会から追放されなかったという思いが絶えず彼につきまとい、キミコを悪魔のようにさえ思う。聖職者としての罪を犯したのは、他でもないデュラン神父自身であった。しかし彼は、その罪をキミコ（悪魔）のせいにし、同じ仲間であったブラウ神父から恵まれることを惨めに感じ、ブラウ神父の憐憫を恥じ、そして軽蔑に怯えていた。その一方で、デュラン神父は、良心の呵責、罪の意識に苦しんでいたのである。

クリスマスのよろこびも私には拒まれている。神は罪人を、地獄のなかで、千年だけ万年だけくらしめるのではない。呪われし者は永遠に苦痛と責苦とを味わわねばならぬ。私は大声をあげ、なにかを叫んだ。自分が狂ったのではないかと思った。ふりかえると、キミコが台所の闕にたって私を見つめていた。動物のようにうつろな、無感動なその眼をみた時私はなぜか彼女に烈しい憎しみを感じてその顔を撲った。けれども畳に倒れたキミコはおなじようにうつろな無感動な眼で私を見詰めていた¹⁴。

デュランは罪を犯した自分への神の追及を畏れてもなお、生に執着しつづけた。そして、ピストルを密かに所持していることを刑事に知られて連行されるのを怖れるあまり、ついにはずっと面倒をみてくれていたブラウ神父に罪を着せ、ブラウ神父は警察に連行されてしまう。デュランの第二の罪であった。

私はキミコをゆさぶりながら叫んだ。「なぜ、黙ってます。わたしはブラウを裏切った。八年の間恵みをかけてくれた男をユダのように売りました。憎みなさい。なぜ、わたしをその眼でみますか」大声をあげて私は嗤った。嗤いながら鏡台にうつっている自分の顔に気がついた。

「どうでもええんよ。どうせわたしには、あなたみたいな西洋人のように教会ってなにか、わからへんし。莫迦な女ですさかい」

キミコは、私にゆさぶられて乱れた髪をなおしながら呟いた。「なぜ、神さまのことや教会のこ

とが忘れられへんの。忘れればええやないの。あんたは教会を捨てはったんでしょ。ならどうしていつまでもその事ばかり気にかかりますの。なんまいだといえぱそれで許してくれる仏さまの方がどれほどいいか、わからへん」

私は起き上がり茫然としてキミコの顔をみた。ふてくされて、口ばしったキミコのこの言葉は、突然一つの啓示のように私の心に突き刺さった。

神を裏切り、教会を捨てた八年間、私は全く神の刑罰に悪夢のように追いかけられ、さいなまれてきた。私は自分を破門した教会を憎み、それを否定しようと試みたが瞬時も神を忘れることはできなかった。

だが成程、その神を忘れれば、それから解放されれば、もはや刑罰へのおのきも死への恐怖も全くなくなるということに気がつかなかったのだ。

布教以来十二年、今日のはじめて私は異邦人の（つまり神を知らざりし者達の）倖せを知った。倖せかどうか、私は断言できない。だがキミコや昨日の千葉とよぶ青年たちの持つあの黄色人特有の細長い濁った眼の秘密だけはわかったような気がする。にぶい光沢をたたえた彼等の眼は死んだ小禽の眼を思わせる。そのどんよりとした視線は私たち白人がなぜか不気味にさえ感ずる無感動なもの、非情なものがあるのだ。それは神と罪とに無感覚な眼であり、死に対する無感動な眼だった。キミコが時々、唱える、あの「なんまいだ」は私たちの祈りのようなものではなく罪の無感覚に都合のよい呪文なのだ。

中略

今日から私は救われるかもしれない。だがそれは私が育った白人の観念とは全く相反した異邦人の方法によってである。あのにぶい情熱のない眼を持ち神を次第に忘れ罪を幾重にも重ねれば、やがて死にも罪にも無感動になることを私ははじめてのように気がついた・・・・・・¹⁵。

（下線は筆者記入）

デュランは、教会を裏切り、旧友を保身のために裏切ったことへの罪の意識からは、結局逃れられな

かった。心の葛藤を日記に記し、それがかつて洗礼を授けた千葉に託した帰り、デュランは不遇な爆死を遂げる。その一部始終を目にした千葉は、彼が自ら死を選んだのだと推察している。千葉の見解が正しいとすれば、これがデュランの第三の罪であり、最大にして最後の罪である。

3.2 千葉の3つの罪

千葉は、肺病を患い、戦争と病との二重の死の恐怖を味わうカトリック教徒でありながら、その一方では親友・佐伯の婚約者である従妹の糸子を佐伯に隠れて犯し続けるという罪¹⁶を背負っていた。千葉は、そのことについて以下のように日記に記している。

ぼくは糸子を、その後も情性のために犯しつづけ、ふかい疲労の重さをさらに自分のくびれた背の上に加えました。罪のくるしさも良心の呵責も感じません¹⁷。佐伯にたいしてすまないという気はありましたが、暗い傾斜をころげていくどうにもならぬ気持です。」

糸子と唇をあわせながら、ぼくの眼はぼんやりと彼女の首にかけられた聖母のメダイユをながめていました。

神父さん、その時、ふしぎなことには、ぼくたちにはこの死が怖ろしいとも醜悪だとも思えませんでした。糸子を犯していることが愛なのか情慾なのかもわかりませんでした。罪悪感も恐怖もなかった。このまま糸子をだき、衰弱して死んでいく、それで仕方がないのだという暗い諦めが貴方の教えてくれた基督教の論理より勝っていました。「どうなるのかしら、あたしたち」糸子は、うつろな声で呟きました。

「どうなるって、どうなるか、わからない」

「いつまで戦争は、続くのかしら」

「いつかは終わるだろうが、終わったって同じことだろう」

「そうね、終わったって同じことね」

くたびれ、シミのういた顔をあげ彼女はぼくをじっとみつめ、それから、人形のようにのろのろと起き上がり胸の聖母のメダイユを手にとりまし

た。爺や夫婦の小屋から、和歌山の南方で旋回している敵一機の動静をつげるラジオがきこえてきました。

「おかしなもんだな。君は佐伯君と婚約しているのだしな。ぼくらは不倫な行いをしているわけだな」

「だまって」もの憂げに彼女はベッドをおり、部屋の隅にしゃがんでスラックスをはきました。「だまってよ」

「まだ、ブロー神父さんに会うこともあるのかね。ミサには行っているの」

「時々だけ。でも、神さまがあろうがなかろうが、もう、わたしにはかまわないの¹⁸」

(下線は筆者記入)

千葉は、戦地に赴く親友・佐伯に対して彼の婚約者と不倫するという罪を犯していた。そして、カトリックの洗礼を受けていながら、心の中では棄教しており、第二の罪を犯している。糸子もまた、ミサに通いながらも、平然と千葉との関係が続けている。千葉は「佐伯にたいしてすまない」という気持ちはあるものの、仕方がないことなのだと罪の意識を覆い隠している。

3.3 デュランと千葉の罪の対比

デュランは、自身の罪の意識と神の追及を畏れるあまり、精神が崩壊していき、ついには自ら死を選ぶという重大な罪¹⁹を重ねる。彼は黄色人の眼を「無感動」と非難し、侮蔑していた。キミコの表現からも明らかなように、黄色人にとっての神（仏）とは、「なんまいだ」と唱えれば全て許してくれる「全てを受け入れる母のような神」であり、神の怒りを教え込まれて育った白人のデュランには、そこが理解できない「不気味な眼」なのである。デュランは聖職者にあるまじき姦淫の罪を犯した後、形式的に棄教したことに罪の意識を感じ、神の怒りを怖れているが、千葉は実質的に棄教したことに何の罪の意識も感じていない。キリストを信じて、仏を信じて、生きても死んでも結局は同じことだと思い、流されるままに生きて死ねばいいのだと、生そのものの

に無気力で消極的である。デュランと千葉の罪を整理すると、以下のようになる。

	デュラン	千葉
第一の罪	無意識	無意識
第二の罪	作為的	作為的
第三の罪	作為的	

仮に、遠藤がデュラン（白人）と千葉・キミコ（黄色人）の信仰意識の差異を描いたとするならば、以下の対比関係が読み取れるだろう。

白人（デュラン）	黄色人（千葉・キミコ）
生きることに貪欲	生きることに無執着 ²⁰
神への畏怖	神を畏れない
罪の意識	罪への無意識
救いの渴望	救いを必要としない
神への信仰心・誠実	不信仰・不誠実

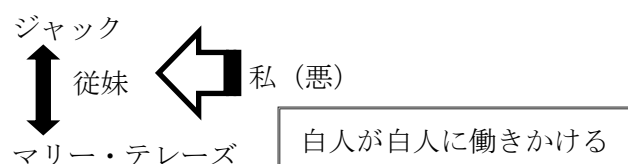
しかしながら遠藤は、黄色人のまったくの神への不信仰を描こうとしたのではなく、白人とは違う黄色人の信仰心を描こうとしたのではないだろうか。本当に神に対して不誠実で不信仰であるならば、千葉はブロー神父に宛てて自ら犯した罪を手紙にしたためたりなどしなかったのではないだろうか。心のどこかに後ろめたさ、棄教への罪の意識があったからこそ、長い告白を書いたのではないだろうか。千葉自身も、なぜブロー神父に手紙を書いたのか、その理由を探していた。そして最後に、「貴方のように純白な世界ほどぼく等、黄いろい者たちから隔たったものはない²¹」ということが、手紙を書いた理由であると述べている。

4. 白人と黄色人との対比から

遠藤文学に共通のテーマのひとつは、「裏切り」である。『白い人』『黄色い人』も、ともに裏切りの対象は「神」であるだろう。『白い人』では、私（主人公）が悪を演じ、ジャックとマリー・テレーズの純愛を拷問という形で試し、その仕打ちに耐え切れなくなったジャックが、自ら死を選ぶという究極の神

への裏切りを犯している。『黄色い人』では、敬虔なカトリック聖職者が神を裏切っていく様子を、黄色人の立場から傍観するという形で描いている。この対比から明らかなことは、遠藤が意図した「白い人」と「黄色い人」との距離とは、「信仰心」であり、「生」に対する考え方である。

【白い人】



【黄色い人】



『白い人』はジャックとマリー・テレーズという従妹関係にある二人の愛と信仰の葛藤を、主人公（私）という「悪」を絡めるという形で浮き立たせている。これに対比して、『黄色い人』は、千葉と糸子という従妹関係にある二人の淡泊で無感動な愛人関係を、デュラン（白人）という「罪」を絡めることにより、黄色人の内に秘めた信仰心を浮き立たせている。注目すべきは、『白い人』の最後で自殺するジャックに向けた、「私」の一言と、『黄色い人』の最後で死を遂げたデュランの死に際し、千葉が抱いた感想との距離感である。ジャックが自殺した知らせを聞いたとき、「私」はその死を想像もしていなかった意外なことだと驚きを隠さなかった。カトリックであるジャックが死ぬはずがなく、「私」もその死を望んではいなかったことが読み取れる。「私」は、自分が死に迫りやったジャックに対して、「お前、神学生じゃないか、それなのに お前は、この永遠の刑罰をうける自殺を選んだのだ」「意味がない。意味がないよ」と言い、ジャックが死んでも、自分（＝悪）は存在し続けるのであり、自分を破滅させなければ

意味がないのだと持論を展開している。一方、デュランの死の知らせをぼんやりと聞いていた千葉は、ブrow神父に対して以下のように綴っている。

あなたには神がこの闇に光をあたえた夜なのでしょう。だが黄いろいぼく等には闇も光も、その区別はないのです。デュランさんはそれを死ぬ前に知ったのでした。爆撃の直前、あの老人がリューマチの足をひきずりながら歩いていった後ろ姿がまだ眼にみえます。爆撃が彼を殺したのではない。日記をぼくに托した以上老人が自殺したような気がしてならぬのです。あのひとがそのため貴方たち神から、今、裁きをうけているか、それとも、裁きも罰もない黄いろい世界、疲れて眼をつむるように、ただ、うつろな眠りに溶けこんだのか、しりません。だが、同じ白い人でもデュランさんのことならまだ、ぼく等には理解できるような気がします。しかし、貴方のような純白な世界ほどぼく等、黄いろい者たちから隔たったものはない²²。

(下線は筆者記入)

この対比から、「私」(白人)はカトリックの自殺に対して「大罪」だという認識があり、神への罪をはっきりと意識していることが分かるしかし、千葉(黄色人)はカトリック教徒でありながらも、自殺に対して大罪だという意識はない。更には、肉欲に屈して棄教しなければならなかったデュランの弱さと狡さ、そして葛藤を理解している様子さえ窺える。千葉にとって、純白の世界は、罪を犯さんと生きる潔白で純真な態度であり、100%の信仰心と無垢な心であったのだろう。しかし、デュラン(白人)にとって千葉や糸子・キミコのような黄色人の態度は、生きることに無頓着で、罪を罪と思わない無感動な世界観であった。しかし、カトリック世界を垣間見たことのある千葉と糸子は、それでも微かなカトリック信仰を棄てることができないでいる。キミコのように、「なんまいだ」と唱えれば、それで許されるとも思っていない。そこから、カトリック世界を知っている黄色人と、まったく知らない黄色人との

意識の差異も読み取れるのである。

5.日本人にとっての「信仰心」

これまで述べてきたことを整理すると、日本人独特の宗教観と信仰心とは、西洋の宗教観とは違う世界が見て取れる。西洋の信仰対象が「神の存在」であるならば、日本人の信仰対象は「神の働き」であると言えるであろう。西洋人が絶対的な唯一の神を信仰し、畏れるのに対して、日本人にとっての神は汎神的であり、畏れがない。遠藤が度々問題視してきたことは、西洋の絶対的な神観をそのまま日本にもってきて根づかせようとしてきた点である。汎神論的風土で育った日本人には、当然異国のしきたりなど受け入れられるはずもない。遠藤は、自身の宗教観を語るとき、「お見合い結婚」と「恋愛結婚」という表現を使っている。「お見合い結婚」は、親から決められた許嫁との結婚で、自ら結婚相手を選んではいない。これに対して「恋愛結婚」は、自分から進んで選択して、愛を貫いての結婚である。遠藤の場合は前者であった。母親が受洗したのを機に、自分も軽い気持ちで洗礼を受けたが、本当に悩んで選択したわけではないため、当然青春期には信仰について苦悶することとなった。遠藤は、キリスト教を棄てようかと思ったこともあると述べている。しかし、いくら相手(キリスト)に「出て行け」と言っても、向こうが出て行かないのだと表現し、生涯棄てることはなかった。そして、その苦悩の裏にある西洋と東洋の思想の隔たりを埋めるため、西洋の宗教を東洋に仕立て直すことを希望していた。キミコが語ったように、「なんまいだ」と唱えれば許してもらえるような神観の日本人には、他の神を信仰してはならないという掟のもと、「アーメン」と唱える異国の神は、どうしてもなじまないのであろう。井上洋治神父は、「キリスト教の日本化²³」の中で、キリスト教が日本に根をおろさない理由を以下のように述べている。

私たちは何故日本人があれ程西欧文化に懐かれ、これを受容することに努めながらも、キリスト教にだけは、〈バタ臭い〉というような表現のもとに一種の本能的反発感を示したかを理解するこ

とができるのである。それは西欧的キリスト教が、他の西欧思想と異なり、たやすく西欧の生活感情からこれを切離して一箇の製品として日本化し、日本流にこれを受け入れるのに極めて困難だったからにほかならない²⁴。

井上神父は、日本という国は、日本とは異質の西洋文化を輸入する際、日本人の心理構造に抵触せず受け入れられるものは何でも、適当な形に「日本化」して日本文化に浸透させてきたと論を展開している。しかし、キリスト教だけは異次元のものであり、日本人には到底その思想は理解できなかった。つまり、キリスト教を日本化することに失敗したのである。日本式に変換できなかったため、日本はキリスト教を「そのままの形」で取り入れたが、そこに大きな誤りがあったと言える。日本人は、表面的にはキリスト教を受け入れたが、肝心の骨格である信仰の基盤であり、思想であるものを理解することができなかったのである。では、日本人が西洋人と同じように、同じ文化のもとで生活すれば、理解できるのだろうか。井上はその可能性を否定し、大胆にも肌の色の違いにまで言及している。

たとえ今仮りに日本人の集団と西欧人の集団とが全く同一の風土的、社会的環境におかれたと仮定してみても（例えば月への移住の如き）、両集団の間の文化的距離は著しく接近するであろうが、しかし一度限り獲得されてしまった骨格や皮膚の色の相違等は、はたして何年後に同じになるだろうか²⁵。

日本という独特の風土と、黄色人であるということが、キリスト教の理解の妨げになっていると主張している。この思想は、遠藤文学にも深く影響を与えている。井上神父と遠藤周作は、同時期にフランスに留学した同志とも言える間柄であり、井上神父の思想の影響を、当然に受けていると言える。この論文を井上神父が発表したのが1963年であり、遠藤が「切支丹研究への注文²⁶」という形で問題提起をしたのが1970年である。遠藤は、その中でフランシスコ・ザビエルの布教にまで遡り、大きな失敗であ

ったと批判している。

フランシスコ・ザビエルの悲劇は日本人が自分たちの宗教を理解しえたと信じたところから始まった。そしてその楽天主義にもとづいて多くの宣教師たちが波濤万里、この黄金の国に渡ってきた。

彼等にとって多くの苦しみはあったにせよ急速な信者の増加と布教のかんりの成功は日本を黄金の国と錯覚せしめた。信徒の数は今日では正確に把握できぬが、かりに四十万としてもそれは現在の人口と日本基督教信者の比率を考えればたしかに驚嘆に価する。だが日本人は彼等が信じたように本当に基督教を信じていたのか。信じていたとすればどのような形であるのか。それは我々の風土にどこまで根をおろしたのか²⁷。

『白い人』『黄色い人』は、遠藤初期の作品として、白人との距離感を如実に描写しているが、人種の問題に言及しているためか、後の大作『沈黙』や『深い河』ほどには注目されていない。しかし、この白人と黄色人の思想・信仰心の温度差こそが遠藤文学の原点であり、後に『黄色い人』の主人公が『海と毒薬』の主人公となり、継承されていくのである²⁸。

6. 結（裏切りの中の「諦観」）

『白い人』『黄色い人』に見る、「弱い人間」が罪を犯すことは、人間誰しもが陥る深い闇であり、その冷酷さを否定することはできないであろう。遠藤文学の中では、その「罪」が生々しく描かれているが、罪は決して遠い存在ではない。遠藤は留学中に、アウシュヴィッツの処刑場などを訪れ、拷問の跡など、まだ戦後間もない頃の生々しい傷跡を目のあたりにし、大きな衝撃を受けている。このときに感じた「罪」と「悪」の印象が、その後の文学に影響を与えたことは間違いないであろう。遠藤は、拷問した人物が、大量に人間を殺戮した後に、モーツァルトを聴いていたことに着眼している。ベートーヴェンではなく、モーツァルトであることに、深く執心しているのである²⁹。ここに、遠藤ならではの着眼点があるのだと言えるだろう。遠藤自身も述べてい

るように、黄色人である彼が白人の物語を描くことは、大変な苦労があったに違いない。『黄色い人』が白人と黄色人の罪の意識の距離感と信仰心の差異を見事に描いているのに対して、『白い人』は黄色人の立場から白人を想像し、白人の罪の意識と信仰心、悪の問題についての描写を描かなくてはならないこともあり、「出世作のころ」の中で「なかなか進まなかった」と述べており、「三田文学」の編集部からは「未熟だ」と掲載を断られている。確かに、黄色人の立場からは、白人の世界を見ることはしても本当の意味で知ることは出来ない。しかしながら、『白い人』と『黄色い人』を比べたときにはじめて、浮かび上がってくる日本人の信仰心が見て取れるであろう。遠藤は、『黄色い人』について白人のようなドラマがないと苦心した。ドラマにするためにデュランという白人を主人公にしなければならなかったのだという³⁰。おそらく、黄色人であれば、少なくとも『白い人』の「私」のような「悪」は徹底しないであろうし、ジャックとマリー・テレーズのような自己犠牲愛は描けなかったのではないだろうか。

遠藤は評論「神々と神と」の中で、以下のように述べて多神教的風土で育った日本人が西欧人の一神教を信じる限界を示している。

然し考えるだけでなく感ずる事が僕たちに殆ど不可能でありました。神々の子である僕たちは、神の子であるこれらの人々の心理、言語、姿勢を感ずるためには、カトリシズムを知るだけではどうにもならないのだと僕は近頃そう考えてさえいるのです³¹。

『黄色い人』のキミコが「なんまいだ」と唱えれば許してくれると評した日本人にとっての神は、その時々で苦しんだ内容によって拝む対象の神が変わるのであり、拝めば許してもらえるのである。後に遠藤が上梓した『沈黙』は、そうした日本独特の精神風土を鋭い視点から描写しており、主人公ロドリゴが踏み絵を踏む際に、かつての師フェレイラが一番辛い愛の行為をするよう説得している。ロドリゴが日本での布教に失敗し、棄教を迫られる場面において、神を棄てる罪の意識から解放されるには、そ

の言葉が何よりの希望であったに違いない。しかし、日本の風土で育った日本人には、ロドリゴのような罪の意識はない。ロドリゴに棄教するように勧めるフェレイラは、以下のように語りかける。

「この国は沼地だ。やがてお前にもわかるだろうな。この国は考えていたより、もっと怖ろしい沼地だった。どんな苗もその沼地に植えられれば、根が腐りはじめる。葉が黄ばみ枯れていく。我々はこの沼地に基督教という苗を植えてしまった³²」

フェレイラの語りかけに強情に抗うロドリゴに、フェレイラは更に以下の言葉を投げかける。

「そうではない。この国の者たちがあの頃信じたものは我々の神ではない。彼等の神々だった。それを私たちは長い長い間知らず、日本人が基督教徒になったと思いこんでいた³³」

この言葉は、「切支丹研究への注文」で遠藤が意見した内容そのままの、遠藤自身の考えを表したものであろう。遠藤文学のテーマである「裏切り」の中で、描かれている日本人は、果たして白人と同じような感覚で捉えていただろうか。宣教師は常に、裏切りに遭う際にユダを思い起こしている。そして、それを試練と捉えてユダの裏切りに遭ったイエスと同じ気持ちを味わっているのだという感慨深さを密かに味わっている。しかし、日本人は裏切りに対してさえも無感覚で無関心である。親友・佐伯を裏切り続ける千葉もなお、メダイユを眺めながらその罪を無感覚に味わっているのである。そこには、日本人独特の、人生に対する「諦観」があるのではないだろうか。白人から見ても一見「無感動」に映る黄色人の生き様とは、糸子が「神さまがあらうがなかろうが、もう、わたしにはかまわないの」と語ったように、神さまがいればそれはそれで拝み、神さまがいなければそれでもよく、どちらであっても人生の状況はさほど変わりはないだろうという、独特の考え方がるのである。そして、キミコのように「なんまいだ」と唱え、神に拝むこともある。しかし、

その願いが叶えられても叶えられなくても、どうでもよいのである。叶えられれば、「お礼参り」に行き、叶えられなければ「仕方がなかった」と言って諦めるのであり、この「諦め」こそが、日本人独特のものである。『沈黙』の中のロドリゴは、キリスト教迫害の最中に沈黙を貫いて助けてくれないイエスに、「なぜ沈黙をするのか」と憤っているが、日本人が同じ状況になったとき、果たして同じように憤るだろうか。やはり諦めるのではないだろうか。和辻哲郎は、『風土』の中で、日本ほど珍しい国はないと評している³⁴。和辻氏は、風土を「モンスーン」「砂漠」「牧場」の3つの類型に分類しており、モンスーン的地域の存在の仕方を「受容的」で「忍従的」としている。日本人の独自性は、この「モンスーン的受容性」と「モンスーン的忍従性」によって成り立っている。気候性の風土によって、「きれいにあきらめる」ことを美德としているのである。遠藤の表現した日本の「独特な風土」とは、まさにこのような風土によって培われた「諦観」であり、神は信仰しているが、信仰を裏切られてもなお「諦める」潔さと美しさがある。遠藤が描いた『黄色い人』の千葉・糸子・キミコは、白人のデュランから見て「生に対して無関心・無感動・無頓着」であり、「気味の悪い」「不思議な目の色」で理解できないものであった。宮坂覺氏³⁵もまた、「黄色い人」の世界は白人と神、罪、死に対しても「無感動」とであると論じているが、しかし本当の意味で「無感動」なのであれば、黄色い人が今日までに築いてきたものは、全てが無味乾燥なもので、生きる意味のないものとなってしまうだろう。しかし、本当に無関心で無感動で無頓着だろうか。自分の背負った罪や裏切りに対し、その事実を冷静に受け入れ、耐え忍んでいると見て取れはしないだろうか。白人の世界では理解し得ない「無関心・無頓着」が日本人にとっては当然の「諦め」なのである。これこそが、キリスト教が日本に根を下ろさなかった最大の理由ではないだろうか。

- ¹ 矢野恒太記念会『世界国勢図会 2015/16 年版』2015 年
- ² 矢野恒太記念会『日本国勢図会 2016/17 年版』2016 年
- ³ 遠藤周作「カトリック作家の問題」『遠藤周作文学全集』第 12 巻、新潮社、2000 年、24 頁
- ⁴ 稲垣良典『カトリック入門：日本文化からのアプローチ』筑摩書房、2016 年、12-13 頁
- ⁵ 遠藤周作『ルーアンの丘』PHP 研究所、1998 年 留学に至る経緯や留学中の出来事などが詳細に記されている。また、後述の井上神父との交流も描かれている。
- ⁶ 遠藤周作、佐藤泰正「年譜」『人生の同伴者』講談社文芸文庫、2006 年、276 頁～298 頁
- ⁷ 遠藤周作「深い河」『遠藤周作文学全集』第 4 巻、新潮社、1999 年、216 頁
- ⁸ 「その言葉」とは「キリスト」の名を指している。なお、遠藤は神の働きかけについて、「X」という表現を用いて随所で説明している。
- ⁹ 田中葵「遠藤周作「黄色い人」論：〈白い人〉と〈黄色い人〉との距離」『遠藤周作研究』2 号（遠藤周作学会事務局）、2009 年、26～27 頁
- ¹⁰ 遠藤周作『解題』（遠藤周作文学全集第 7 巻）新潮社、1999 年、364 頁
- ¹¹ 佐藤泰正氏は遠藤との対談の中で、「主人公は混血児で、しかも母親が厳格なピューリタンであり、母の抑圧のなかで彼のなかの性的なものやいろんな欲望が目覚めていく。」と述べている。（注 6、121 頁）
また、主人公自身が冒頭「マルキ・ド・サドはうまいことを言っている。」と述べていることから、拷問によるサディズムが窺える。
- ¹² 遠藤周作「深い河」『遠藤周作文学全集』第 4 巻、新潮社、1999 年、200 頁
- ¹³ 「一番辛い愛の行為」については、『沈黙』の中で踏絵を前に躊躇するロドリゴにフェレイラが「今まで誰もしなかった一番辛い愛の行為をするのだ」と諭すと同時に、「最も大きな愛の行為」だとも表現している。（遠藤周作『沈黙』新潮文庫、1981 年、266 頁）
- ¹⁴ 前掲書、118 頁
- ¹⁵ 前掲書、120～121 頁
- ¹⁶ 後に引用した千葉の日記には、糸子を犯すことを「罪」と表現している。千葉は糸子に恋をしていたのかもしれないが、互いに恋愛感情については触れておらず、千葉自身も糸子を愛しているのか分らないと述べており、ただ肉欲

のためだけに不倫をしていたのかは定かではない。しかし、千葉は親友に隠れて婚約者と関係しているという事実により「罪」だと感じている。

17 「罪」と表現している限り、実は千葉にとっての良心の呵責はあったものと読み取れる。

18 前掲書, 100~101 頁

19 キリスト教において、自殺を罪とする根拠には議論の余地がある。遠藤の文学では、一貫して自殺を「罪」としている。

20 「どうでもいい」と言っているが、しかし本当の意味での無頓着ではない。流される運命のままに生きて、全てを受け入れた上で、自分の意思で生きているのである。

21 前掲書, 134 頁

22 前掲書, 134 頁

23 井上洋治「キリスト教の日本化」『理想』358, 理想社, 1963 年

24 前掲書, 2 頁

25 前掲書, 4 頁

26 遠藤周作「切支丹研究への注文」『日本思想大系』第 25 巻月報 6, 岩波書店, 1970 年

27 前掲書, 4 頁

28 遠藤自身が、『私の文学』の中で、「基督教と日本人」、「西欧と日本人」というテーマが縦糸となっているのだと述べている。

29 『人生の同伴者』参照。具体的な理由は述べていないが、アウシュヴィッツで何百人も殺した後、普通に家に帰り、普通の父親として子どもに接し、子どもの弾くピアノに感動しているということに深い感慨を覚えている。人間には元来、残酷な一面を保有しており、大量殺人を犯す人間が決して特別な人格ではないということを感じ取っていたのではないだろうか。

30 『人生の同伴者』, 123~124 頁

31 遠藤周作「神々と神と」『遠藤周作文学全集』第 12 巻, 新潮社, 2000 年, 16 頁

なお、山根氏は、『黄色い人』は一神論的風土の思想と汎神論的風土の思想との対比であると論じている。(山根道公「遠藤周作と井上洋治：背中合わせの戦友」『遠藤周作を読む』(佐藤泰正 編) 笠間書院, 2004 年)

32 遠藤周作『沈黙』新潮文庫, 1981 年, 231 頁

33 前掲書, 232 頁

34 和辻哲郎『風土：人間学的考察』岩波書店, 1979 年, 232 頁

35 宮坂覺「アデンまで」『黄色い人・白い人』『遠

藤周作：その文学世界』(山形和美編) 国研出版, 1997 年

なお、宮坂氏は、遠藤は「黒い人」を書くべきであったと指摘している。宮坂氏によれば、『アデンまで』が黒人世界を描写したものであり、遠藤が述べたように、『アデンまで』から『黄色い人』は一本の縦糸で繋がっているのである。(注 10, 362 頁)

(Received: January 21, 2017)

(Issued in internet Edition: February 6, 2017)